

入所して一ヶ月未満の利用者様に対する支援 ～安心して過ごすために～

16CC11 高橋亜美

I. はじめに

介護老人保健施設は、介護を必要とする高齢者の自立を支援し、家庭への復帰を目指すために、医師による医学的管理の下、看護・介護といったケアはもとより、作業療法士や理学療法士等によるリハビリテーション、また、栄養管理・食事・入浴などの日常サービスまで併せて提供する施設¹⁾である。介護実習Ⅲで私は、自宅復帰を目指しているA様に出会った。A様は退院した後施設に入所し、一ヶ月経っていない。リハビリやフロアで行われる体操・レクリエーション以外の時間はフロアでテレビを観るなどして過ごすもののどこか落ち着かない様子であった。そこで、安心して過ごすことができるために余暇活動を見つけるとい活動を行った。その中から、役割を持つことは安心・安全につながるということを学ぶことができたため以下に報告する。

II. 実習先種別・実習期間

介護老人保健施設

2017年6月26日～7月28日（うち23日間）

III. 事例紹介

A様 80歳代 女性

1. 家族構成及び生活歴

結婚後は専業主婦。長男家族と同居し、孫の世話などをしてきた。

施設に入所する前は日中独居。

2. 入所に到った理由

2016年7月低ナトリウム血症にて入院。数日で回復し、退院。その後盗られ妄想出現、物忘れが悪化、アルツハイマー型認知症と診断。2017年2月よりデイサービス利用開始、独歩・入浴洗濯等ができていた。2017年6月初旬深夜から言動がおかしくなり翌朝歩行困難、転倒。救急搬送にて入院。2017年6月中旬に施設に入所。

3. 健康状態

主な疾患としてアルツハイマー型認知症がある。

4. 性格

明るく人と話すことが好きで、穏やかな性格。言われたことをきちんとやったださるまじめな性格。

5.1 日の過ごし方

フロアで行われている体操やレクリエーションには参加している。1日に2～3回リハビリがある。

リハビリやレクリエーションがないときは自分の席ですっとテレビを見ている。

テレビを観ていないときは周囲をキョロキョロと見るか、時計を約30分おきに見ている。

IV. 介護の実際

1. 課題の発見と分析

2017年に施設に入所。フロアで一日のほとんどを過ごすものの落ち着かない様子でいた。話をしていく中で「用事を頼まればやるが、それ以外の時間は何をやらしたいのか分からない」「何をすればいいのか言ってほしい」などの発言があった。また、職員の方との関わり方を見ていると、言われたことをきちんとやったださるまじめな性格であることが分かり、日中の何もしない時間に不安を感じているのではないかと考えた。このことから、「何もしないという不安を解消する」ということを課題とした。

2. 介護上の課題

記録や本人から趣味に関する情報があまり得られなかったため、様々な活動を行ってみる必要がある。

3. 介護目標

長期目標：施設内で安心して過ごすことができる

短期目標：1-①何もすることがないときに集中して行える活動を見つけられる

1-②何もすることがないときに1人で編み物を行うことができる

1-③施設内での新たな役割を見つける

V. 実施及び結果

7月10日(1-①)

朝、裁縫を提案すると意欲的な発言をしてくださったが、実際にやろうとすると裁縫にいやな思い出があるそうで実際にはやってくださらなかった。無理に実施しようとする利用者様の負担になってしまうと考え実際にやっていただくのではなくアドバイスをいただきながら裁縫をすることにした。

7月12日(1-①)

様々な活動の1つとして編み物を提案した。他の活動に比べて集中して取り組まれており、「昔はチョッキなんか自分で作っただよ」といって教えてくださった。また、その日の別れ際に「楽しかったよ」と言う発言が見られた。

7月14日(1-②)

A様が1人で編み物を行っているときは、編むときは黙々と編んで、疲れたり飽きたりしたら休憩する。そしてまた編みたくなったら編み始めるという様子から、自分のペースで活動できているのではないかと考えた。

7月17日(1-③)

アクリルたわしを作ることを提案すると「たわしね、私も昔よく作っただよ」と楽しそうに言って作り始めてくださった。作ったアクリルたわしを職員の方にプレゼントするのはどうかと提案した。しばらく渡しにいくのを渋っていたが職員の方のほうから来てくださり、たわしを渡すことができた。職員の方から褒められたり、「ありがとう」と言われてうれしそうにしている様子が見られた。

VI. 考察

今回は何もしないという不安を解消するための余暇活動として編み物を行うことが出来た。また、編み物をいつでも出来る環境を作っておくことによって空いた時間にA様が自分のペースで編み物を行うことが出来ていたように感じたが、編み物だけを行っているとう飽きてしまうとの発言があったため今後は、編み物以外にも1人で行える活動を増やしていくことが必要であると考えた。

また、今回の活動から施設での役割を見つけることが出来たが、アクリルたわしをA様から施設の方に直接渡しに行くということにまだ抵抗があるのではないかと感じた。実際に渡したときに職員の方から感謝されたりすると嬉しそうな様子が見られるため、今後もA様から直接職員の方に渡したほうがよいと考える。

施設内での役割を見つけるということは、その人の安心につながると考える。日野原ら(2012)は、「おうちにいらっしゃる認知症の人でも、洗濯物を取り込んできちんとたたむということをやってもらおうといった役割があると、とても気持ちが安定します²⁾」と述べている。このことから施設での居場所を見つけたうえで、役割を見つけると言うことはA様の安心につながるのであると考えた。また、役割を見つけることはA様本人の喜びにもつながることが分かった。日野原らは、さらに「小さな役割でもいいからそれを行って、評価され、褒められると、これは一種の社会貢献をしていることになりますから、認知症の人にとって、生きていく喜びを与える²⁾」と述べている。このことから、役割に対する評価や感謝をすることがA様の喜びにつながるのだということを学んだ。

私は、その人の好きな活動であったり自分の為に行う活動を考えることが余暇活動を考えることだと思っていたが、生活歴や性格をふまえて考えることができなければ本当に利用者様のやりたい余暇活動を考えることはできないということを学んだ。

VII. おわりに

今回のケーススタディーでは、利用者様にとって役割を持つということは安心につながるだけでなく、役割に対しての評価や感謝を得ることによって喜びにもつながっているのだということを学んだ。

私は今回の経験から、利用者様の性格や生活歴などを含められた支援計画、できることや習慣などを活かした支援計画を立てることが出来る介護福祉士になりたいと思った。

参考・引用文献

1)公益社団法人全国老親保健施設協会 HP http://www.roken.or.jp/wp/about_roken

2)日野原重明・長谷川和夫・秋山紘子・辻哲夫 2012 年 「健康と生きがい」 中央法規 p.80